

# 園芸から人と植物とのかかわりへ

—松下幸之助花の万博記念賞の受賞を機に省みる研究の軌跡—

松尾英輔

東京農業大学バイオセラピー学科

## How My Work Evolved from Horticulture to People-Plant Relationships :

### On Being Awarded the 17th K. Matsushita Expo '90 Prize

Eisuke MATSUO

*Department of People and Animal/Plant Relationships, Tokyo University of Agriculture*

**Keywords :** acquiring, agricultural education and agronomy education, daily life and horticulture, fostering, healing, home horticulture, horticultural therapy, horticultural well-being, human-horticulture relationships, humanity, people-plant relationships, pleasure and hope, socio-horticulture

園芸福祉, 園芸療法, 人と園芸とのかかわり, 癒し, 獺る行動・思想, 家庭園芸, 暮らしと園芸, 人間らしさ, 人間・植物関係学, 農芸教育, 社会園芸(学), 育てる行動・思想, 喜び・愉しみ

#### はじめに

新型インフルエンザのあおりを受けて、5月に行われる予定であった本学会2009年大会が9月に延期されました。9月開催までの善後策に奔走された大会関係者のご苦勞は大変だったことでしょう。この場を借りてお礼申し上げます。

その延期の関係で当初計画されていた本命の講演を皆さんに聴いていただくことができず誠に残念でした。その穴埋めを下村孝実行委員長と私がすることになりました。私が代役の一人となったきっかけの一つは、この2月に松下幸之助花の万博記念賞(以下松下賞と称することがある)をいただいたことで、その内容が人間・植物関係学と深くかかわっているからということのようでございます。

いきさつはさておき、ここに、私自身の研究の軌跡をふりかえる機会を与えていただいたことに深く感謝いたしますとともに、皆さんが今後仕事を進められるうえで、何か参考になることがあれば嬉しく思います。

以下にまず、松下賞の授賞式の折に述べました謝辞を紹介しておきましょう。

「私は、社会園芸という耳なれない領域の仕事をしています。その内容は、空気のように、普段は意識することのない、暮らしの中における園芸に関するものです。

その仕事を、この栄えある松下幸之助花の万博記念賞にご推薦いただき、そして評価くださいましたことを大変光栄に存じますとともに、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

このような評価をいただきましたことは、同じ領域の仕事をしている方々や関心をお持ちの方々に、自信と勇気を与えてくれるものと、大変喜んでおります。

と申しますのも、私がこの領域に踏みこんだ1970年代には、奇人・変人とみなされ、四面楚歌の状態だったからです。

このような雰囲気の中で、ごく少数の方々が熱心に応援してくださいました。見て見ぬ振りをしてくださった方々もありました。そして、何にもまして、この仕事に対する確信と自信、そして推進するエネルギーを下さったのは、家庭での園芸に親しんでおられる多くの市民の皆さんでした。このように園芸に熱中できるのはなぜだろうという、今日に至る大きな命題をいただいたのです。

これらすべてのの方々にお礼を申し上げます。また、行く先の見えない仕事に現を抜かしている、空に泳ぐ風のような私を、巧みにつなぎとめてくれた家内と家族に深く感謝しています。

暮らしの中の園芸は、私たちにしあわせと健康をもたらす、身近な活動の一つです。今回顕彰いただきましたことは、この園芸がもっともっと多くの市民の暮らしに根付くきっかけになるもの、と大変うれしく思っております。誠にありがとうございました。」

2009年9月18日受付。  
本稿は、人間・植物関係学会2009年大会の公開講演の草稿として準備したものである。

ここに述べましたように、少し変わったこと、珍しいこと、新しいことに取り組みますと、必ずといってよいほど、さまざまな障害と非難を乗り越えなければなりません。しかし、それを甘受しなければ、新しい領域は拓けないものであることを、身をもって体験いたしました。

## 1. 研究内容の位置づけと流れ

まずはじめに、私の研究を振り返るとき、その特徴を一言で表現するならば、動植物とのかかわりを「生産科学」という従来の農学の視点に加えて、「生活科学」という視点から取り上げることを主張し、実践してきたことといえましょう。すなわち、戦後の農学部における農学の取り組みをみますと、農家がいかに商品を生産し経済的な利益を上げるかに重点がおかれていました。園芸を例にとれば、植物を中心にすえ、いかに植物へのかかわり方の技術を開発し応用するかという視点から研究、教育、政策が進められていました。もちろんそれが園芸農家の生産に貢献してきたことはいうまでもありません(第1表)。

第1表 商品生産を目的とした、あるいは生活(暮らし)としての農耕と園耕

呼称		農耕	園耕
英語の呼称		Agriculture	Horticulture
元の意味		土地を耕す	圃んだ土地を耕す
農 を 行 う 思 想 と 目 的	獵 る	農業 (Agro-Industry) (Agri-business)	園芸業、園芸農業 または園芸産業 (Hort-Industry) (Hort-business)
	育 て る	園芸 (Agriculture)	園芸 (Horticulture)
	商品生産を目的とする(産業)		
	暮らしの一部として行い、育てることを楽しみ、その産物を生活に役立てて味わう(生活)		

松尾(1986)をもとに一部補足・改変した。

いっばう、非農家の、主に都市の住民は植物とのかかわりはなかったのでしょうか。決してそうではありません。彼らは猫の額ほどの庭を耕し、軒先の小さな花壇に情熱を注ぎ、鉢植えの植物の成長を見守ってきました。このような植物とのかかわりもまた園芸と呼ばれています。しかしながら、農学部の講義でその話題が取り上げられることはありませんでしたし、国や自治体の農業政策の中に取り入れられることもありませんでした。

このような園芸は、アマチュア園芸や趣味の園芸と呼ばれ、経済的利益を生むわけではない、市民の遊びとみなされていました。1970年代には、このような園芸に関する月刊雑誌が80万部も発行されていたにもかかわらず、園芸学を学ぶ専門家がその遊びにかかわることはタブーでした。園芸の専門家としては恥であるというとらえ方が感じられました。また、1977年に市

民農園が公認されるようになった当時の設置の可否をめぐる議論の中で「市民農園は、園芸農家に益するどころか、生産物の売り上げの減少を招く」という反対意見もあった、と関係者の方からうかがいました。

たしかに、個々にみれば経済商品生産のうえでは取るに足らない都市住民の園芸です。その園芸に、農家よりずっと多い市民が親しんでいるのはなぜでしょうか。実りが少ないがゆえに遊びと軽んじられるのは仕方がないとしても、それでも市民がそれに熱中する理由は何でしょうか。経済生産の面では決してプラスになっているとは思えないにもかかわらず、農家よりずっとずっと多くの市民が親しむ園芸には、これまで明らかにされていない、あるいは論議されてこなかった、きわめて重要な意義・役割が隠されていて、それを明らかにしていくのも園芸の専門家としての使命ではないか、と私は考えるようになりました。ここに、暮らしの中における園芸の意義・役割を探る長いトンネルの旅が始まりました。現在の言葉でいえば、動植物とのかかわりを、生産科学として取り上げることに加えて、生活科学として追究する旅です。

その視点の変化は、植物中心から脱して、人間中心に園芸を取り上げることにありました。すなわち、従来は、植物への働きかけで植物がどう反応するか、それをどう生産につなげるか、簡単にいえば、技術面が主な課題となっていました。これに対して私は、園芸およびその生産物に、人間はどのような場面でどのようにかかわってきたか、それが私たち人間だけでなく、対象となっている植物に対してどんな影響をもたらしたか、を一つひとつ丁寧に明らかにしていこうとしたのです。これが、「園芸」から「人と園芸とのかかわり」に関する研究への展開です。

ところがこの取り組みは、園芸という、もともと植物に人が積極的にかかわる分野における領域にとどまることはできませんでした。つまり、園芸とは違い、普段の生活でかかわることのない植物(自然の植物をも含めて、園芸領域以外で対象とされる植物)との見えにくいかわり方についても考えていかねばならない側面があることを実感するようになったからです。こうして、「人と園芸とのかかわり」から、さらに「人と植物とのかかわり」に関する研究(人間・植物関係学)へと発展することになりました。

これらの研究には、人間学的視点が求められ、人文科学的、社会科学的アプローチが必要であり、多くの課題は実験による再現が困難です。また、私たちはその方面でのまとめ方や評価法になれていません。したがって、成果が出にくく、興味はあっても取り上げにくいことが問題です。こういうわけで、研究仲間がほとんどいませんでした。このことは逆の視点からみれば、植物は私たちの暮らしの中にありますから、話題はどこにでもあり、少し勉強すれば誰でもすぐに専門

家になれるということでもあります。しかしながら、前記の謝辞で紹介しましたような雰囲気の中で進めざるを得なかったのはきわめて残念なことでした。

## 2. 三つの主要な研究課題と異分野交流

ともあれ、何をやりたいと思いつきながら、何をしてきたのか、ということがきっかけでその仕事を始め、どのように展開してきたかについて、研究という仕事に踏み出した頃からご紹介することにしましょう。

私の研究面での仕事は、大きく三つに分けることができます。一つは制御環境下におけるキュウリの生態反応に関する研究、二つ目は、テッポウユリの繁殖に関する研究、三つ目は、人と園芸・植物とのかかわりに関する研究です。

農学部3年生のときのことで、キュウリの研究をしていた先輩の手伝いをするようになりました。その頃、九州大学農学部には、日本でも先駆的な最新の環境制御実験室が創設されたところでした。その実験室を使って、制御環境下におけるキュウリ花芽の雄雌分化、特に温度や日長によってキュウリの雄花や雌花がどのように制御できるか、という研究をしている先輩がいるから手伝わないか、というわけです。当時大人気であった小田 実氏の「何でも見てやろう」ではありませんが、「何でもやってみよう」という野次馬根性から、何のためらいもなく引き受けました。これがキュウリとともに学部から大学院を経て学位をいただくまでほぼ8年間を過ごすことになるきっかけでした。

しかし、もともとキュウリの研究をしようという気持ちはさらさらありませんでした。密かに考えていたのは、当時話題になっていた放射線育種に関することでした。そのために、関連する書物をかなり読みましたし、理学部で放射線に関連する授業も受けました。ところが、そのキュウリの仕事を手伝っているうちに、放射線育種に対する関心は雲散霧消してしまいました。キュウリを素材に卒論を、引き続いて修士論文を書いていくうちにすっかりのめりこんでしまい、とうとう博士論文もキュウリで書いてしまうことになってしまったのです。

このことから私が学んだのは、学生時代にやりたいと考えていたことがいかにあいまいなことであったかということと、特別に関心がない話題でも真剣に取り組んでいるうちに面白さを感じてくるようになるということでした。

### 1) 何でもやってみるか

キュウリの研究を続けている頃、特に学部から修士課程の時代にかけては、農学における植物学よりも文化的なものに興味がありました。京都での大会だからというわけではありませんが、木原 均先生のコムギの起源に関する研究、今西錦司先生のサルの研究、それ

らを遂行するための調査・探検など、いわゆる今西学派といわれる方々の華々しい活躍に心を奪われていました。そういうわけで、今西先生の著書はもちろんのこと、梅棹忠夫先生や川喜田二郎先生などの著書もむさぼるように目を通し、文化人類学や社会人類学などに傾倒していました。

当時九州大学には、今西学派の影響を受けた森下正明先生(理学部)、河端政一先生(理学部)、岡崎 敬先生(文学部)、さらにこれらの先生方と親交が深くかつ今西先生に傾倒しておられた松本徇夫先生(生産科学研究所)がおられました。これらの先生方の助言と支援をいただき、九州大学学術探検研究会(当時)の活動を支え、将来はその研究会の主力メンバーとなりうる人材を育成しようと、修士課程在籍中に学部学生と大学院生による探検部を1964年に組織し、その活動に現を抜かしていました。私が直接関係していた頃の九州大学探検部は、京都大学の探検部ほど華々しい活動はできませんでした。しかし、この頃に異分野の方々と接し、教えていただいたことが、その後の人と園芸・植物とのかかわりの研究に大きな影響を与えているように思います。

私の仕事の方向付けに直接関係したのかどうか私にも定かではありませんが、強烈な印象を植え付けられた活動がありました。それは、探検部創設が縁でその機会をいただくことになったものですが、熊本県荒尾市の炭鉱住宅跡地のぶどう園開設予定地(後で三井グリーンランドとして開園された)の中心に、その農場で働く人たちとそこを訪れて一緒に働く都市住民との交流拠点となる宿泊施設「働く青年の家」を建設するというプロジェクトでした。参加学生は、世界学生奉仕団(World University Service; WUS)に属するアメリカの大学生と九州大学学生を合わせ26名、1964年6月下旬からほぼ40日の共同宿舎生活で、家の上棟式までこぎつけました。もちろん、Director, Co-directorのほかには建設専門家の指導と支援があったことはいまでもありません。

このプロジェクトを立案し、現場で指揮にあたられた加藤退介ディレクター(風致計画学、当時九州大学農学部)は、この期間中に折にふれて、プロジェクトのねらいを語っておられました。その話で印象に残っているのが、農園やそこでの農作業は私たちが癒してくれるとともに、明日のエネルギーを与えてくれること、特に都市住民にとっては緑の環境の下で汗を流すことが心身の健康につながることで、さらに、都市と農村の青年たちがそのような場を共有し、語り合うことによって、その垣根が取り払われ、よりよい国の未来を築く糸口になること、だからそのような未来を担う青年たちが自然にかかわる体験を共有しながら語り合える宿泊施設をつくるのである、という主旨でした。

今考えてみますと、これは、農耕・園耕のもつ重要

な特質を把握しているだけでなく、都市と農村の乖離（かいり）を懸念し、その解決策の一つとして提案されたプロジェクトであったといえるように思います。当時の私は、話としては理解できるものの、その領域に踏み込もうとは思っていませんでした。しかしながら、このときの話がいまなお頭にこびりついていることを考えますと、私の心のマグマ溜りに生き続けていて、人と園芸・植物とのかかわりに関する仕事へと導くきっかけの一つになっていたのかもしれない。

## 2) テッポウユリの研究と家庭園芸の研究

探検部活動の一つとして、1970年12月に東支那海に浮かぶ無人島 尖閣列島に行ったことが、次の研究課題であるテッポウユリ研究のきっかけとなりました。ちょうど沖縄の本土復帰が決定した直後のことでしたが、九州大学と長崎大学の探検部が合同で、尖閣列島学術調査という大風呂敷を広げて出かけたのです。新聞社のほか、多くの方々から費用や物資を支援していただいている以上、成果を出して報告書を刊行することが私たちの義務だと考えていましたので、尖閣列島で採取してきた植物で研究成果を出す必要がありました。仕事には、それが一段落したところでお世話になった方への報告の義務がある、という部活動で学んだ考え方は、研究に区切り(整理)をつけ、論文として発表しながら次に進めてゆく習慣をつけるうえで役立ったように思います。

尖閣列島学術調査の折に学んだことに、「テーマに集中的に取り組む」という同行記者坂東愛彦氏の真摯な姿勢がありました。同氏は経済学部出身の社会部記者で、調査隊に同行することが決まっていた。彼は、出発前に徹底的に尖閣列島の資料を収集して読破し、特にこの地域の目玉になっている石油資源などに関係する地質分野のことについては、門外漢であったにもかかわらず、自分の言葉で表現できるまで、地質学者の松本徹夫隊長に疑問を投げかけていました。現地でもこの姿勢は続き、尖閣列島の石油資源に関する記事を調査中に書き上げていました。その記事は一般読者にもよくわかる文章で書いてありました。これを通して、新しい話題でも集中的に学ぶことによって短期間で専門家並みのレベルに達しうることを教えられました。

この調査から帰ってテッポウユリに取り組むことになり、その研究成果を含めた報告書「東支那海の谷間 尖閣列島-九州大学・長崎大学合同尖閣列島学術調査報告書」は1972年に発行することができました。1974年には、世界でも著名なテッポウユリ球根の生産地として知られる沖永良部島を抱える鹿児島に転勤いたしまして、ますますテッポウユリにのめりこむことになりました。その後テッポウユリの研究は1990年頃まで精力的に続けました。それらの成果は、園芸学会雑誌、Journal of the American Society for

Horticultural Science, Scientia Horticulturae などに発表しています。蛇足になりますが、これらの成果を評価していただき、1982年には園芸学会賞(奨励賞)をいただくことになりました。

## 3) 暮らしの中の園芸への関心

他方、キュウリの研究をとりまとめる過程で、主に中国南部で栽培される華南(南支)型キュウリ、北部中国で栽培される華北(北支)型キュウリ、という二つの異なる生態型の成立には、単に気候条件の違いだけでなく、選抜という人間のかかわりが無視できないことを感じておりました。しかし、当時はその方面に踏み込むことはまったく意図していませんでした。

キュウリの仕事が一段落した頃から、ネギの研究をしている先輩の手伝いを始めました。そのときに、ネギ類の方言が九州内でもかなり異なることに気づき、ネギの方言採取の旅をしていました。その成果は1970年代中頃から日本地理学会や園芸学会で紹介しました。

また、鹿児島に移動する前から、指宿市にある九州大学の試験地(農園)に行くこともありまして、鹿児島県の墓にはいつも新鮮な花が供えてあり、北部九州の墓とはすっかり様子が異なっていることに驚いていましたが、鹿児島に住むようになったのを機会に、どんな花が墓花としてよく使われるかを調べてみようということになりました。

1975年のこと、鹿児島大学南方科学資料センターの報告会が縁だったと記憶しておりますが、鹿児島大学教科教育研究会(代表 斎藤 毅助教授、1977年に「地域と教育」研究会と改称)の活動に加わりました。ここでは主に教育学部関係の方々との交流する機会を得、公開講座や奄美諸島の調査などに参加することになりました。

ご存知のように、1970年代は「公害の時代」ともいわれ、公害が告発され、広く社会の問題となった時代です。真昼にもかかわらず太陽が赤く見え、都市はコンクリート・ジャングル、アスファルト砂漠と呼ばれました。水田、河川、湖沼では魚介類を含めた多くの小動物が農薬や工場廃水で激減しました。園芸に関係する話題としては、都市における緑の喪失、そして食べものの農薬汚染がありました。私の実家も農家でしたから、農薬使用の実態はわかっていました。このような社会背景を受けて、都市の住民は身近に緑を取り戻し、安全な食べものを確保しようと、家庭園芸が盛んになりました。1970年代の半ば、いわゆる第一次園芸ブームの到来です。

このような社会状況がきっかけの一つになったように記憶していますが、これまでの仕事に疑問をもつようになりました。大学の農学部では、なぜ農家を対象とした教育しかないのか、というわけです。前に述べましたように、園芸の専門家の間では、園芸農家の経

済的生産が中心で、都市住民が行っている園芸、いわゆる趣味の園芸とかアマチュア園芸はまったく考慮されていませんでした。

ところが現実には、多くの都市住民が小さな花壇や菜園を耕し、あるいは、鉢物の手入れを楽しんでいます。その情報源の一つだったのでしょうか、「趣味の園芸」というテレビのテキストは毎月80万部も発行されるというのです。何かおかしい。だってそうでしょう？植物とのかかわりは、衣食住の素材としてだけでなく、快適な居住環境の創出、教育の媒体、伝統文化としての盆栽や各種の植物イベント、植物の愛好家グループや近所づきあい話の種など、暮らしの至る所にあり、すべての国民がその恩恵を受けています。その暮らしに結びついた園芸が、経済生産には縁遠いという理由だけで高等教育の場から抜け落ちているのはおかしいのではないかと、思うようになりました。

そこで注目したのが、市民はどのように園芸を楽しんでいるか、ということでした。まず取り上げたテーマの一つは、市民が家の前の道路端で手入れ・世話をしている植物とその容器に関するものでした。どんな容器を鉢の代用品(アイディア鉢)として用い、どんな植物を植えているかを調査しながら、あわせて、どんなところがおもしろく、どんなところに惹かれて園芸をしているのか、どんなときに喜びや愉しみを感じるかなどを尋ねました(松尾, 1978)。

ちょうど同じ頃、農林省はそれまで農地法違反とみなしてきた貸し農園をみなおし、市民農園としてその設置を助成することになりました。1977年にその市民農園が鹿児島市にも開園されたのを機会に、市民はどんな期待をもって市民農園に申込み、何を栽培し、耕作後の感想はどんなものかを調べました(松尾, 1979)。

これらの成果を1978年に学会で発表しておりますが、調査過程の中で、農耕・園耕が、私たちの暮らしの中でどのような意味をもっているか、その本質の一端を明らかにすることができました。そのデッサンはすでに1976年の鹿児島大学公開講座で披露しておりますが(松尾, 1977)、上記の結果は、このデッサンを肉付けするものでした。それらをまとめたものが「アマチュア園芸論—身近な園芸の哲学—」(1982, 私家版)です。

以上に述べたようないろいろな話題を、学会で発表していたのですが、会員の反応は冷ややかなものにかみえませんでした。発表会場の参加者はいつもごくわずかでした。ですから仕方ないかもしれませんが、大会の初っ端や殿(しんがり)などに発表の場をもらっていました。そのわずかな参加者の中に、故西尾康三先生、下村 孝先生、樋口春三先生、木島温夫先生など、後日、人間・植物関係学会で活躍される方々の顔がありました。これらの方々との討論や意見交換は仕事を続けるうえでの大きな心の支えでした。

このような発表に対して、墓花や道端の園芸などお

かしな話題を取り上げている若造がいる、あの仕事は園芸の研究ではない、その結果は再現できるのか、などという声が聞こえてきました。あの仕事は止めさせるという忠告が先輩の耳に入っていたという話も後で聞きました。後日、「なかなかおもしろい研究をやっている人がいるなあ、と思っていた。」とささやいてくれた方が何人もありました。いま考えてみますと、これらは、当時の発表内容が何らかの形で会員に強力なインパクトを与えていたことを示すものともいえましょう。

また、テッポウユリの研究はすべて共著で発表していたのですが、上記の諸課題に関する論文はほとんどが筆者の単著でした。学会雑誌にも投稿したのですが、学会の趣旨に合わないと言門前払いを喰らいました。国内だけでなく、国際学会でもそうでした。私は決して学会を非難しているわけではありません。学会にはそれぞれのねらいがありますから、門前払いがあっても理不尽というわけではなく、投稿先の選択が間違っていたのです。受け付けてくれるところを探し、もしなければ、受け付ける学会を創るか、受け付けられるような道を開けばよいのです。

実際、このような話題は、日本地理学会では1982年(奄美大島におけるネギの識別と方言)、日本農業教育学会誌では1986年(農芸教育)に論文として掲載されました。しかし、園芸関係の学会雑誌で最初に掲載されたのは、1990年のHortScience(アメリカ園芸学会発行)誌上のことで、その内容は好みの花のことでした(Matsuo, 1990)。1990年以降は、主な公表の場を、HortTechnology(アメリカ園芸学会発行)と2年ごとに開催されるInternational People-Plant Symposium(国際人間・植物シンポジウム)に求めてきました。

上記のような傾向は、1980年末まで続きました。その中で、筆者と直接の関係はありませんが、研究面で関係の深い話題について特筆すべき事件が1982年に起こっています。それは園芸学会で発表された「カップ咲スイセンの花向きを制御する研究」でした(原, 1982)。常に南向きに咲く庭のスイセンを、住人が北側の居間にいて正面から見られるようにしたい、という動機で取り上げられた話題です。ところが、そんな研究はおよそ公的研究機関でなすべき研究ではないとまで、糾弾されたのです(原, 1983; 松尾, 2005)。すべての関係者がそうだとは思いませんが、第二次世界大戦後35年以上も経った1980年代までは市民生活に関係する園芸の仕事がいかにも偏見の目でみられていたかを示したものといえましょう。

### 3. 園芸分野における非生産科学的分野への社会的関心の高まり

そして大きな転機が訪れたのは、1990年前後のことでした。

まず、鹿児島大学の学部改革(1990年度から実施)に際して、「社会園芸学」という授業科目が開設されました。その計画段階で検討された園芸生産学講座計画案には次のような内容が記されています。

「近年都市緑化や余暇の利用等に関連して、園芸にかかわる社会的要請が増大してきた。直接的な農業生産とはやや趣を異にするが、このような幅広い文化的側面に呼応しうる教育をも志向する。」そして人材養成の方向の一つに「1)・(省略)・、2)人口の都市への集中に基づく自然の喪失、豊かな人間生活を送るための余暇の利用や趣味の活用等は、園芸に対する新しいニーズを醸成してきた。このような社会的要請に応えることのできる人材を養成する。3)経済効率への過度の偏重は、われわれの価値観の一部に重大な欠落をもたらしたように思われる。植物に親しみ、土に親しむ園芸の実践によって、土の香りのする、粘り強い、一味違った人間像をもつ人材を養成する。」(松尾, 2005)。

この改革案が、改革にあたって現教官を切り捨てる(教官の生首を切る)わけにはいかないから、彼に合わせようと検討されたものであったとしても、そのような領域を容認する素地が当時の鹿児島大学農学部園芸学科に存在していたことは大いに評価してしかるべきでしょう。この計画案に基づいて社会園芸学という科目を設けることが1989年には決定し、1991年から授業(2年生)が開講されました。

また、1990年には国際花と緑の博覧会(花の万博)が開催され、花と緑に対する人びとの視点が変わってくる大きな転換点となりました。万博期間中の5月に開かれた日本学術会議農学研究連絡委員会によるシンポジウム「花とみどりと人間生活(1)-その技術的展開を求めて」(東京)で「暮らしの中の花と緑」と題して講演する機会をいただきました(松尾, 1990)。この頃には日々の暮らしの中における花と緑の役割がかなり認識されるようになっていたことがうかがえます。

さらに1990年には園芸学会が、4年後の1994年に第24回国際園芸学会議を京都で開催することを決定しました。そしてそのモットーが“The Beautification of Human Life and Its Environment through Horticultural Science”(健やかな生活と美しい環境を創る園芸)と決められ、これに沿ったシンポジウムを編成する役目を私が仰せつかることになりました。無関心のようにみえていた会員の中にも、園芸分野における人間問題の重要性を看破していた方々があったことをとても嬉しく思った瞬間でした。これをきっかけに1992年の園芸学会春季大会から「暮らしと園芸を考える」小集会が開かれるようになりました。

上記学会の要請に応じてシンポジウム「Horticulture in Human Life, Culture, and Environment」(豊かな人間生活、文化の発展、快適環境の創造にかかわる園芸)を、D. Relf博士(当時バージニア工科・州立大学准教

授)と協力して編成しました。本シンポジウムは園芸学会の絶大な支持をいただき、海外の研究者だけでなく、日本からの参加者も多く、成功裏に終えることができました。

#### 4. 人間・植物関係学への展開

この頃になると、まずは身の回りで私たちはどのような形で植物とかかわっているかを徹底的に探ってみようという姿勢になっていましたから、手当たり次第に話題を拾い上げ、可能な限り現状を明らかにし、その意義・役割を模索してきました。学会発表のテーマも1978年に始めた「家庭園芸に関する研究」を、1985年からは「園芸と人間とのかかわりに関する研究」と改めました。これからさらに人間と植物とのかかわりへと展開したのは、1990年代後半だったように記憶しています。それらの成果を、学会発表の場やグリーン情報という雑誌にパイロットワークとして紹介してきました。

それらの中で代表的な話題は、心身の健康問題にかかわる園芸療法です。

園芸療法という言葉は、Horticultural therapy という英語の訳語ですが、すでに1980年代初期に紹介されています。しかし日本では、その後10年間ほとんど関心を払われなままでした。筆者は1990年にアメリカ国内の関係者を対象に開催されたシンポジウム「A National Symposium (このシンポジウムは、後にInternational People-Plant Symposium; 国際人間・植物シンポジウムに発展した) “The Role of Horticulture in Human Well-Being and Social Development” (本シンポジウムの論文集は日本では「しあわせをよぶ園芸社会学」(マルモ出版) という単行本として出版されている。)」に参加した機会に、園芸療法に関する教育について調査しました。その結果を1991年に園芸雑誌で紹介しています(松尾, 1991)。

1992年度には、当時アメリカ園芸療法協会の重鎮であり、かつ園芸分野における人間問題に関する研究の提唱者であったD. Relf博士を文部省の助成で鹿児島大学の客員教授として招待することができ、九州だけでなく、東京においても、園芸療法や園芸領域における人間の問題についての討論と講演を通して、日本の研究者や市民を啓発する機会となりました。これらは、アメリカの園芸療法を紹介した広田靨子氏(1992)、アメリカで園芸療法の研修をしてきた澤田みどり氏の実践活動(澤田, 1992)、世界中の園芸療法の実態を報告したグロッセ世津子氏の啓発活動(財・日本緑化センター, 1992)などとあいまって、日本における園芸療法の幕開けの役割を果たし、1990年代半ばからの、園芸療法に対する市民の爆発的関心の高まりへと発展して行きました。その様子は拙著「園芸療法を探る-癒し

と人間らしさを求めて」(1998, グリーン情報)に紹介されています。

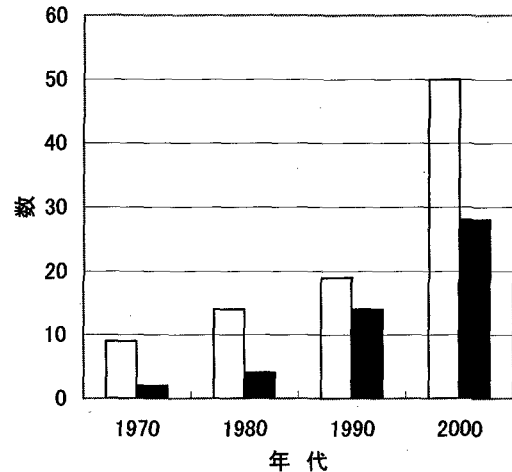
園芸療法の発展は、園芸福祉という新しい概念を生み出すことになりました。園芸療法への関心の高まりにより、多くの研究グループが誕生しました。それらはそれぞれに独自の解釈をさまざまな媒体を通して広めることになり、園芸療法とは何かがわからないくらいに混乱してきました。他方、職業としての園芸療法をめざし、その資格制度を要請する声が高まってきました。さらに、健康保険料支出の増大に悩む地方自治体では、元気高齢者の健康対策として園芸療法に関心を抱いていましたが、療法という言葉の壁の厚さを痛感し始めていました。

このような背景を受けて、理解しやすくかつ資格制度が整備しやすいような園芸療法の概念を規定し、元気高齢者対策にも活用できるような概念として、「園芸福祉」という言葉を提唱しました(松尾, 1998)。このとき園芸福祉(学)を、「なんらかのハンディをもつ人たちだけでなく、健常者を含めたすべての国民の「福祉」、すなわち、心身の癒し、健康の回復や維持・増進さらにQOLの向上などを図るために、園芸を媒体として活用する領域とその技術」と定義していますが、別な表現をとれば、園芸を通して人間らしさを実感する、生きている喜びを味わう、快感を味わい、笑顔を引き出す、ということもできましよう。要するに、園芸福祉とは、園芸を通して引き出せるしあわせを積極的に推進する活動ならびにその考え方であるといえます。その根幹は、園芸を通して、癒しと喜び・愉しみを味わい、人間らしく生きていることを実感することにあります。

園芸療法もその園芸福祉活動の一つです。その特徴がどこにあるかといえば、対象者が療法的かかわりを要する人であること、療法としての手続きをきちんと踏んでいること、の2点にあります。それらの条件が満たされていないければ、その活動は園芸レクリエーションであるということになります(松尾, 2009b)。

このような人と園芸・植物とのかかわりについての仕事は、テッポウユリの仕事とほぼ並行的に進めていたのですが、1980年代まではテッポウユリの仕事の陰に隠れたいわば副業でした。しかし、私の意識のうえではテッポウユリの仕事を凌ぐ重みをもっていました。

1980年代末に鹿児島大学農学部学科改組によって「社会園芸学」の開講が、1990年には京都での国際園芸学会議のモットーに取り上げられることが決定してから、表向きにも堂々とこの仕事に取り組むことができるようになり、心理的負担が少なくなりました。1992年に九州大学に移動してからは、私自身の研究課題としては、テッポウユリは縁遠くなり、人と園芸・植物とのかかわりに専念することになりました。これら人と園芸・植物に関する学会発表や発表論文は、年



第1図. 人間・植物関係に関する発表課題数(白)と論文数(黒). (10年ごとにまとめた).

を追うごとに著しく増えていきました(第1図)。とはいえ、学生諸君の卒論にこの話題への取り組みを勧めめることはためらいました。私自身がこれまでの仕事に対する園芸界の壁の厚さを嫌というほど味わってきたからでした。この前後に取り上げた話題には第2表に示すようなものがあります。

第2表. 人間・植物関係の論文に取り上げた主な話題.

年代	話題
1970	アイデア鉢, 鹿児島市民農園
1980	奄美大島の墓花, ネギの方言, 農芸教育, 鹿児島の墓花
1990	好きな花嫌いな花, 園芸体験の有無, 園芸の意義, 園芸雑誌の発行, プラットホームの植物, 社会園芸学とは, 施設・病院での園芸, 日本の園芸療法, TV・ラジオの園芸情報, 植物名の色
2000	人間・園芸関係の研究史, 日本の市民農園, 日本の園芸療法, 門前・玄関前の植物, 七草, 文献から見た日本の園芸療法, 園芸の保育効果, 押し花, 福祉とは?園芸にみる人間性, クラインガルテン, 園芸作業の運動機能, 植物介在療法

忘れてならないのは、本領域の発展に際して、海外の研究者が大きな役割を果たしてくれたことです。文部省の助成による鹿児島大学客員教授 D. Relf 博士については先にもふれましたが、1994年以降は日本学術振興会の支援により、第3表に示すように、この分野では世界的に著名な7人の専門家を招へいすることができました。彼らは、日本各地の研究者との討議や講演・セミナーを通して、園芸療法や人間・植物関係研究と応用についての啓発に尽力してくれました。これが2001年の人間・植物関係学会の発足およびその後の発展に繋がっています。園芸療法や園芸福祉などへの関心の高まりを始めとして、人間と園芸・植物とのかかわりに関する授業科目が開講されたこと(第4表)に対しても、間接的かもしれませんが、これら外国人研究者の貢献は大きかったと確信しています。

第3表. 文部省招聘客員教授<sup>2</sup>あるいは日本学術振興会外国人招へい研究者(短期)として来日した人間・植物関係分野の研究者たちと研究課題.

年度	招へい研究者名	採用時の所属・職	研究課題名
1992	D. Relf <sup>2</sup>	バージニア工科大学・州立大学・准教授	園芸と人間とのかわりに関する研究
1994	C. Lewis	モートン植物園・上級研究員	コミュニティにおける園芸, 造園活動の役割
1997	R. Ulrich	テキサス A & M 大学・教授	人間に対する植物の心理的, 生理的効果とその応用に関する研究
1998	M. Burchett	シドニー工科大学・教授	園芸植物による身近な空気汚染のモニタリングと汚染の除去に関する研究
1999	G. Groening	ベルリン芸術大学・教授	教育, 文化, 環境に果たす市民農園と公園の役割
2000	D. Relf	バージニア工科大学・教授	園芸療法と園芸福祉-人間・植物関係の視点から
2001	C. Shoemaker	シカゴ植物園園芸専門学校・校長	人間・植物関係の研究における方法論の探索と確立に関する研究
2004	V. Lohr	ワシントン州立大学・教授	人間・植物関係の心理・生理的把握に関する情報交換と問題点の解決

松尾 (2005) による.

第4表. 人間と園芸・植物とのかわりに関する授業科目<sup>2</sup> (4年制大学関係, 1998年以降).

授業科目名	単位数	開講初年	開講大学・学部
生活園芸論	2	1998	東京農業大学農学部
人間・植物影響学	2	1999	東京農業大学農学部
都市園芸学	2	1999	東京農業大学農学部
社会園芸学	2	1999	東京農業大学農学部
社会園芸学	2	1999	南九州大学園芸学部
園芸文化	2	2000	九州東海大学農学部
学校の緑のすすめ	2	2001	福岡教育大学
人間・植物関係論	2	2002	九州大学農学部
園芸療法概論	2	2003	広島県立保健福祉大学
園芸療法概論	2	2003	聖カタリナ女子大学
社会園芸学Ⅰ	2	2004	南九州大学園芸学部
社会園芸学Ⅱ	2	2004	南九州大学園芸学部
園芸福祉学	2	2004	広島国際大学工学部
社会福祉学Ⅲ	2	2005	南九州大学園芸学部
人間植物関係学	2	2006	東京農業大学農学部
園芸療法学	2	2006	東京農業大学農学部
園芸療法学Ⅱ	2	2007	東京農業大学農学部
園芸福祉論	2	2009	日本大学生物資源科学部
園芸の福祉	2	2010	広島文化圏大学社会情報学部

<sup>2</sup>後年, 閉講された科目も含む. 1997年までについては, 松尾 (2005) を参照.

多くの学会では, 研究成果を研究発表会場で口頭やポスターで発表することは容易ですが, 論文として公表するには, 学会が決める関門を通過しなければなりません. それが皆さんご存知の査読とか審査とか呼ばれるものです. 投稿原稿を第三者が読んで, 内容を判断して学会が発行する機関紙(学会雑誌)に掲載するかどうかを判断します.

先に述べましたように, 私はその公表の場を主に HortTechnology と国際人間・植物シンポジウムに求めてきました. 関連学会で門前払いを受けたことと, 日本ではいまなお逆輸入のほうが影響力は大きいことからでした. 私個人だけの成果の公表ならそれでよいでしょう. しかしながら, すでに1990年代に入りますと, 花の万博や京都での国際園芸学会議を契機に, 人と園芸・植物とのかわりに関心をもつ研究者が多くなってきました. これらの研究者に同じことを求めるわけにはまいりません. さらに, 同学の士を増やし, 研究の裾野を広げることも学問の発展には欠かせません. そのためには, できることなら日本で, しかも日本語で誰はばかることなく公表できる場はないものかと考えるようになっていました. また, 1990年代後半

の国際人間・植物シンポジウムの折に, このシンポジウムを日本で開催しないか, という打診もありました. 園芸・植物と人とのかわりに関する研究情報を, 日本から世界に向けて発信できればさらに好ましいことはいうまでもありませんが, 当時はそのような組織はありませんでした.

ちょうどこのような折に, 園芸療法関係の学会を組織してはどうかという話がもちあがり, 浅野房世氏(当時 SEN), 澤田みどり氏(園芸療法研修会), 山根 寛氏(当時京都大学医療短期大学), 鈴木正明氏(当時共働舎)と私が大阪に集まって討議しました. 1999年7月のことでした. その会合では, 園芸療法の基礎固めをするうえでも, まずは人間と植物との関係を究明するとともに, さまざまな学問領域に分散している人間・植物関係の情報を収集して共有できる学会を発足させることを優先すべきではないかという結論となりました.

この結論を受け, 浅野房世氏の幅広い人脈を活かして, 錚々(そうそう)たるメンバーを発起人として迎え, 人間・植物関係学会設立準備会を組織. その準備会発足記念シンポジウムを2000年10月に東京で開催する運びとなりました. このシンポジウムに花を添えてくださったのが, 河合雅雄先生(当時兵庫県人と自然の博物館館長, 京都大学名誉教授)と D. Relf 博士(当時バージニア工科大学教授)でした.

学会立ち上げにあたって, 打ち合わせや準備に関する経費については, 九州日観植物株式会社(西川 勲社長)からいただいた研究助成金が大いに役立ちました. 学会の立ち上げ準備とその後の運営は, 本学会の初代幹事 森 啓一郎氏の協力なしには進まなかったことでしょう. 蛇足になりますが, 記念シンポジウム開催にあたっては, 何分にも大掛りの行事なので, 赤字になった時には一人当たり50万円から100万円くらい負担する覚悟をしていなければならないと, 浅野氏と話していました. さいわいなことに浅野氏の精力的な募金活動と多くの参加者のお陰で, 何とか個人負担なしに済ませることができました. 遅ればせながら, ご協力くださった方々に厚く御礼申し上げます.

この準備会発足記念シンポジウムを受けて, 2001年9月に人間・植物関係学会が発足することになりました. 将来は国際人間・植物シンポジウムを日本で開催



するという発足時の願いは2004年に兵庫県との共催により、「The 8<sup>th</sup> International People-Plant Symposium (第8回国際人間・植物シンポジウム)」を「世界園芸療法サミット」と相乗りする形で実現することになりました。その詳細は、「園芸療法国際サミット報告書」(兵庫県立淡路景観園芸学校, 2004), 人間・植物関係学会雑誌 第4巻第1・2号(2005)と第8巻第1号(2008), 「Acta Horticulturae No. 790」(2008)に紹介されていますので、ご覧ください。

この間、私は2003年3月に定年退職し、2004年4月から東京農業大学にお世話になっております。東京農業大学では、農学科の人間・植物影響学分野に属し、赴任した年から新学科設立準備のお手伝いをさせていただくことになりました。こうして2006年に発足したのが、農学部のパイオセラピー学科です。当初この学科の名称は人間生物共生学科として文部科学省と折衝中だったのですが、大学の方針でパイオセラピー学科に変更されました。その学科で、私は人間植物関係学研究室に所属しています。

研究の軌跡という観点から申しますと、キュウリ、テッポウユリ、人と園芸とのかかわりとさまよってきましたが、九州大学農学部に移転してからは主に人間・植物関係分野の話題を追っています。

## 5. 人間・植物関係の視点からの訴え (研究内容の要約に替えて)

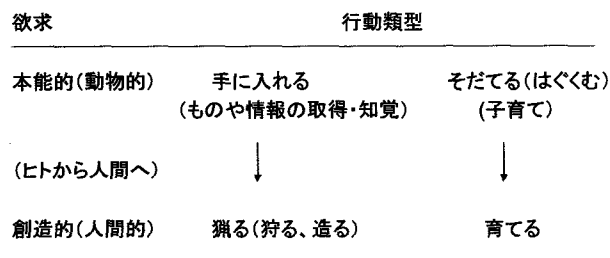
以上に紹介いたしましたように、私は園芸研究の正統と考えられていたキュウリやテッポウユリの生理・生態という仕事から出発しました。しかしいつの間にかそこからはずれ、気がついた時には、暮らしの中における園芸や植物とのかかわりという、これまでいわばタブー視されていた領域に踏み込み、奇人・変人扱いを受けることになっていました。そのことがかえってこの仕事に集中しやすい環境を醸成してくれたのかもしれません。

では、これまでの長い研究生活を通して、何を明らかにでき、何を訴えようとしたのでしょうか。それは、まだまだ今後に期待するところが多いことですが、松下賞の顕彰文に次のように要約していただきました。「・・・植物を育てることの重要性を見据え園芸福祉を提唱するとともにその活動の普及を通じて社会に多大な貢献をされました。」

その植物を育てることの重要性とはどういうことなのでしょう。少し長くなりますが、まとめておきましょう。

私たち人間は、個体維持の本能と種属維持の本能もっています。このような本能的(動物的)欲求から生まれる行動が、「ものや情報を『手に入れる』」行動と「子どもを『そだてる』」行動です。これらを人間に特

有に備わっている神経系を働かせて創造的に行っている行動(時実, 1974)がそれぞれ「獵る」行動, 「育てる」行動です(松尾, 1986; Matsuo, 1992)。これらの創造的行動は、創造的(人間的)欲求から生まれるものだといえましょう。端的に言えば、頭を使って行っている行動ですが、より好ましい人間としてあるいは人間らしく生きるには、これらの両行動がバランス良く保持されていることが重要です(第2図)。



第2図. 欲求と行動にみるヒトから動物への進化。

これら二つの行動の特徴をみますと(第5表), 生きものも非生きものも獵る対象となりますが、育てる対象となるのは生きものだけです。かかわり方は、獵る場合には主体的・意図的・計画的・目的적입니다。育てる場合には、独自の遺伝情報に基づいて成長している生きものが対象なので、客観的・支援的・養育的・対象任せになります。これには、対象とかがわりつつ時間を共有しながら、よく観察し、何を訴え、何を求めているかを推察する能力を求められます。これは、他の生きものあるいは他人と共感し、ものと時間を共有しながらいかに共生するかというような、いわば社会性の芽を内蔵しています。そこには、人間社会に生きるために、たまには矯正することも必要となる要素も含まれています。

第5表. 獵る行動と育てる行動の特徴の比較。

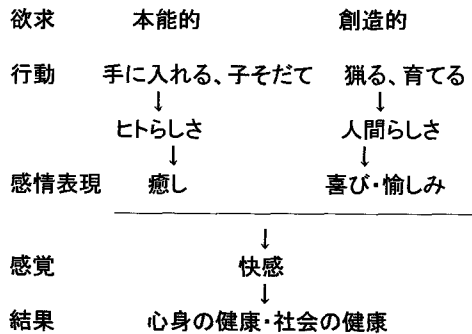
項目	獵る	育てる
行為	狩る・造る	そだてる
行動の対象	生きもの・非生きもの	生きもの
かかわり方	主体的・意図的・計画的・目的的	客観的・支援的・養育的・対象任せ
接触	一時的・短期間	長時間・継続的
目的達成	手っ取り早い	忍耐を要する・時間がかかる
難易性	簡単・易しい	困難・難しい
仕事としてのかかわり方	断片的・分業的	一体的・総合的・体系的
捉え方	物(質)・非生命体	命あるもの・生命体
効率性	効率的	非効率的
態度	利己的(自己中心)	利他的・社会的(相手中心)

松尾(2009)に補足・改変したものである。

また、獵る場合にはかかわる期間・時間は一時的・短期間で済みますので、手っ取り早く、もっと端的に言えば、効率的な目的達成が可能となります。しかし

育てる場合には、長期間、継続的にかかわる必要がありますので、目的達成には時間がかかり、忍耐・我慢を要することになります。したがって、効率という観点からみれば、非効率的ということになりましょう。

私たちは、ヒトという本能的存在として生まれ、より創造的な人間という存在へと成長します。そして、暮らしの中で本能的欲求を充たしながら癒しを、創造的に行動しながら喜び・愉しみを得ることによって、生きていることを実感し、快感を覚えます(第3図)(松



第3図. 植物とのかかわりがもたらす健康(模式図).

尾, 2009a)。したがって、成長の過程で、狩ることだけでなく、育てることをも実践し・学ばなければ、人間としての好ましい成長は望めませんし、日常の暮らしの中でもそれらを体験しなければ人間らしく生きている実感を味わうことはできません。家庭でも学校でも、両行動を幼いときから体験させる必要がありますし、大人も暮らしの中でそれを実践することによって生きる喜びや愉しみを味わうことができます。

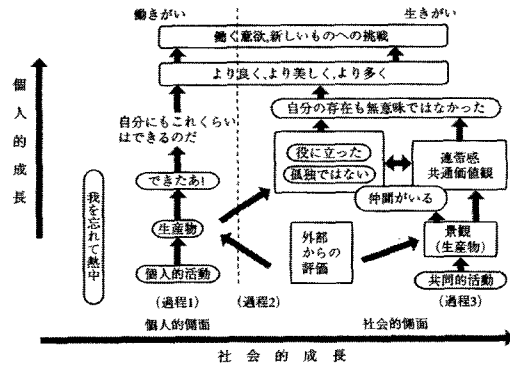
このような観点から、現代の私たちの暮らしをみたとき、そこでは、狩る行動が圧倒的に優位であり、育てる行動がいかに欠けているかを実感して慄然とならざるをえません。外見上では元気に暮らしているようにみえるのですが、その実は、本当の意味では人間らしさを味わうことのない、きわめて不健康な状態であるといえましょう。子どもも育てる機会や場が与えられているとはいえません。これでは、子どもを人間化するのに必要な支援がうまくいっていないこととなります。児童虐待を始めとした最近のさまざまな社会問題もこのような実態と関連している可能性が高いのです。

いずれにしても、どうすれば育てることを体験し、その思想を学ぶことができるのでしょうか。育てる対象となるのは生きものですから、ヒト、動物、植物を育てることによってそれを学ぶことができます。これらの中で、誰もが日常生活の中でできるのは、動物や植物の世話や手入れです。ヒトを育てる場合と違って、動物や植物であれば多少の失敗も許されます。というより、その失敗から失敗しないようにはどうすればよいかを学ぶことが大切なのです。その育てる行動を身

近にいつでもどこでも実践できるのが園芸です。

その園芸はどのような形で本能的欲求を充足し、さらに人間の成長を支援するとともに、人間らしさを実感させているのでしょうか。

本来、園芸は植物と向き合う個人的な活動です。その中で、技術、知識などのほか、観察力、判断力、自信など精神的な面で私たちの個人的成長を助けてくれます(第4図)。同時に社会的な成長をも支援してくれます。

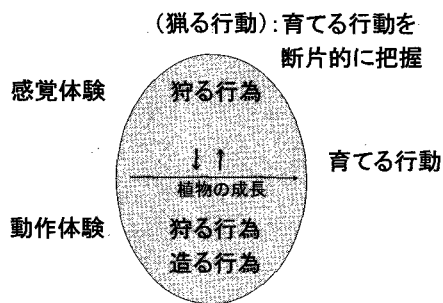


第4図. 園芸を通しての個人的、社会的成長. 松尾(2005)による.

たとえば、きれいな花が咲きましたね、珍しい花を栽培していますね、昨日いただいたトマトはとてもおいしかった、お宅の芝生はきれいですね、などという外部からの評価は、孤独ではないこと、自分の仕事が役にたっていることなど、社会とのつながりを実感させてくれます。この実感は、さらによりよいものを、より美しいものを、より多くつくって喜んでもらうという意欲と生きがいを生み出すのです。植物の手入れ・世話には、対象の様子をよく観察し、その背景を押し量り、共感を呼び起こす能力の養成と訓練も含まれています。これらの行動の中に、社会の一員としての自分の位置づけを見いだしている姿を読みとることができます。つまり、社会的に成長しているのです(第4図)。

人間は創造的に行動すると申しましたが、前述のように、これには狩る行動と育てる行動とがあります。前者は、日常生活のあらゆる場所で、いつでも経験しています。しかしながら、それだけでは、より人間らしく生きるうえでの必要条件を充たしているとはいえません。あわせて育てる行動が欠かせないのです。その育てる行動は生きものの手入れ・世話を通してしか体験できません。繰り返しになりますが、その行動をもっと身近に、いつでも、どこでも実践できる活動が園芸なのです。

すなわち、植物の成長にあわせて手入れ・世話をす一連の過程が育てる活動です。ところが、これを断片的にみると、観賞、収穫、防虫・病害予防の工夫など「狩る」という創造的行動を体験していることとなります(第5図)。狩る行動それだけでも達成感や満足



第5図. 園芸という育てる行動を断片的にとらえると狩る行動となる。

感は得られます。大切なことは、園芸は単に育てる行動を充たすだけでなく、その中に狩る行動をも内蔵していることです。これら両行動を充たすことによって、私たちは達成感・充足感を味わい、意欲がでてきますし、喜び・愉しみを感じます。これが本能的欲求を充たした癒し感とあいまって、快感つまりしあわせ感をもたらします(第3図)。言葉を換えると、これが人間らしく生きている自分、人間らしさを実感することができます。だから私たちは園芸に熱中するのです(松尾, 2009a)。

このように、園芸を通して実現できるしあわせを、積極的に推進しようという考え方・運動が「園芸福祉」と呼ばれるものです。簡単にいえば、園芸に親しんで、幸福感を味わい、笑顔を招きましょうというものです。前に述べましたように、「園芸療法」は、療法的かわりが必要とする人々の園芸福祉を实践する活動として位置づけられます。つまり「園芸療法」は園芸福祉活動の一つであるということが出来ます。

いずれにしても、このような笑顔が生まれる心理状態と身体を動かすという運動機能とがあいまって、園芸は心身の健康をもたらします。心身の健康は社会的健康にもつながります。社会的に健康な発想をもてるということは、私たちを取り巻く環境への関心を呼び起こし、環境の健康をいかに確保するかという考えを生むことにつながります(松尾, 2009a)。

従来、動植物の世話や手入れをする「農」を通しての教育は、その技術を教えることのほかに、人格陶冶という側面があることが論じられてきました。この両者は別物のようにみえるので、教育に際して、どちらを選択するかということになりがちですが、そうではありません。私は、農という活動は、生きものを育てることによって、人間として成長しかつ生きるうえで欠かせない「狩る」行動・思想と「育てる」行動・思想という相補的な二つの行動・思想を体験しながら養成する活動であり、教育の場では、そのいずれに重きを置くかの違いであるという視点で、その重要性を訴えてきました(第6表)。

このように、植物を育てることは、本能的欲求と創造的欲求を充たすことによって、癒されるとともに、

第6表. 生きものを媒体とする教育の考え方.

従来の考え方		筆者の考え方	
農業教育	生命人間教育 人間教育 (生きものを育て	ヒトを媒介として育てる思想を	育成教育
	産業(技術)教育 (技術を教える)	農芸教育 〔ヒト以外の生きものを媒介として育てる思想を養成する〕	
		農業教育 〔ヒト以外の生きものを媒介として狩る思想を養成する〕	創造教育
		非生きものを媒介として狩る思想を養成する	

松尾(1986)を一部改変した。

より人間らしく成長するために欠かせない、育てる思想を養成し、人間らしく生きる実感を与えてくれます。その活動の中で私たちは癒され、喜び・愉しみを感じ、快感を覚えるのです。これが私たちの健康につながります。特に高齢者にとっては、子育てや後継者養成の責務が終わり、育てる欲求が充たされにくくなります。できるだけ子どもたちと触れあう機会をつくることとその欲求を充たし、生きている実感を与え、笑顔を生み出すことにつながるでしょう。その媒体として、いつでもどこでも、子どもたちとともに植物の手入れ・世話をしながら育てることを学びかつ教えることができ、そして自分自身も生きていることを実感できるのが園芸なのです。ここに、農耕を含む園芸がPPK(びんびんころり)運動という高齢者の健康促進活動の一つとして期待される理由があります。

### おわりに

私が人と園芸・植物とのかかわりという仕事に取り組むきっかけになった時期は、公害の時代に求められます。そして、日本の研究者の関心が高まったのは1990年前後、さらなる発展がみられるようになったのは2000年代になってからといえるでしょう。

今回いただいた松下賞は、園芸のプロパーがそのアウトローの仕事の評価したものであると、財団関係者の方が評してくださいました。そうかもしれません。別な見方をすれば、時代の推移につれてアウトローがアウトローではなくなったともいえます。このことは、求められる仕事や評価は社会の情勢によって変化するものであることを示しています。何事でも結構ですが、今信じるころに従ってまい進することが納得のいく仕事をできる必要条件ではないかと思っています。

私の仕事面における園芸から人間・植物関係への移行は、きわめて円滑に進んだようにみえます。私自身もある意味では楽しみながら進めることができました。とはいえ、苦しくなかったといえば嘘になります。何よりも苦しかったのは、身近な研究者ほど遠い存在に感じたことでした。それを乗り越えることができたのは、単なる猪突猛進の信念だけでなく、テッポウユリの研究というよりどころをもったうえで、新しい分野に踏み込んだこと、いわば二足草鞋を履いてきたか

らではなかったか、と考えています。

これまで、批判や忠告を含めて陰に陽にさまざまな形でご支援をいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

## 引用文献

- 原 周作. 1982. カップ咲スイセンの花向きを制御する研究. 昭和47年秋園芸学会発表要旨: 336-337.
- 原 周作. 1983. 秋季園芸学会花き部会で起った発言. (噴霧口). 農業および園芸 58(1): 36.
- 広田靨子. 1992. 高齢者と体の不自由な人にやさしい園芸 - わたしの見たアメリカの"園芸療法". NHK 趣味の園芸 No. 236: 66-67.
- 松尾英輔. 1977. 現代における家庭園芸の意義 - 育成教育の提唱 -. pp.198-228. 地域と教育研究会(編). 鹿児島大学公開講座 地域と教育. 春苑堂書店. 鹿児島市.
- 松尾英輔. 1978. 家庭園芸に関する研究. 1. アイデア鉢について. 鹿児島大学農学部学術報告 28: 229-241.
- 松尾英輔. 1979. 家庭園芸に関する研究. 2. 鹿児島市民農園について. 鹿児島大学農学部学術報告 29: 249-258.
- 松尾英輔. 1982. 奄美大島における在来ネギ属野菜の識別と呼称. 地理学評論 55: 151-164.
- 松尾英輔. 1986. 農芸教育の提唱(1). 農耕を通して行う教育: 農業教育と農芸教育. 日本農業教育学会誌 17(2): 1-5.
- 松尾英輔. 1990. 暮らしの中の花と緑. pp.10-15. 学術会議 農学研究連絡委員会・国際シンポジウム「花と緑と人間生活」実行委員会(編). 『シンポジウム「花と緑と人間生活」講演集』. (学術会議 農学研究連絡委員会・国際シンポジウム「花と緑と人間生活」実行委員会. 89ページ).
- 松尾英輔. 1991. 園芸治療 - ホルティセラピー その1, 2. グリーン情報 12(5): 50-51, 12(6): 42-43.
- 松尾英輔. 1998. 園芸療法を探る - 癒しと人間らしさを求めて -. グリーン情報. 名古屋市.
- 松尾英輔. 1998. 園芸福祉(学)(Horticultural welfare)の提唱. グリーン情報 19(1): 61.
- 松尾英輔. 2005. 社会園芸学のすすめ - 環境・教育・福祉・まちづくり. 農文協. 東京.
- 松尾英輔. 2009a. 緑と人の健康とのかかわり - 緑(植物)とのかかわりはなぜ健康によいか -. 日緑工誌. 34(3): 482-487.
- 松尾英輔. 2009b. 園芸福祉と園芸療法. pp.234-236. 金浜耕基(編). 園芸学. 文永堂出版. 東京.
- Matsuo, E. 1990. Analysis of flower appreciation and its international comparison contribute to progress of flower production and international flower trade. HortScience 25(12): 1468-1470.
- Matsuo, E. 1992. What we may learn through horticultural activity. pp.146-148. In: D. Relf (ed.). The role of horticulture in human well-being and social development. Timber Press, Inc. Or. USA.
- 澤田みどり. 1992. 園芸療法 - ホーティセラピー (上), (下). 園芸新知識 47(11): 9-14, (12): 25-29.
- 時実利彦. 1974. 人間であること. 岩波新書 746. 岩波書店.
- 財・日本緑化センター. 1992. ホーティカルチュラル・セラピー(園芸療法)現状調査報告書. 財・日本緑化センター. 東京.